

オケのテイキは、おもしろい レポート

2014年9月東京定期版



オヤマダアツシ (音楽ライター)

「オケのテイキ」はおもしろい！来場した子どもたちと日本フィルのファシリテーターたち

■子供たちが作る“自分たちのドン・キホーテ”

国内外で数々の音楽ワークショップを成功させてきたマイケル・スペンサーさんが、2014年4月から日本フィルの「コミュニケーション・ディレクター」に就任。その彼がリーダーとなり、定期演奏会で取り上げられる作品に新鮮な手法でアプローチする音楽ワークショップが『オケのテイキは、おもしろい』だ。これまで、2014年5月の定期演奏会を前にラヴェルの「ダフニスとクロエ」を、6月の定期演奏会を前にシベリウスの「夜の騎行と日の出」を取り上げ、前者は定期会員の皆さん、後者はアートを学ぶ美大生たちが参加。もちろん日本フィルからも数名の楽員が加わり、全員が多種多様なアイデアを出し合いながら新しい音楽を創造してきた。

さて、9月の定期演奏会では山田和樹の指揮によってリヒャルト・シュトラウスの交響詩「ドン・キホーテ」が取り上げられ、ストーリーや各場面を生き生きと描き出した演奏に多くの聴衆から喝采の声が飛んだ。

今回はその「ドン・キホーテ」をモチーフに、夏休み真っただ中の8月4日、東京杉並区の天沼小学校で行われたワークショップの様子をお伝えしよう。



ダンスには即興的なパートも

参加したのは約30名の小学生たちと数名の保護者。マイケル・スペンサーさんと日本フィルの楽員8名がリードし、“自分たちのドン・キホーテ”を音楽で描いていく。もちろんそこには“リヒャルト・シュトラウスの「ドン・キホーテ」”に親しむためのヒントがいくつも隠されており、参加者たちは楽しみながらコンサートの予習もしてしまうのだ。会場になった天沼小学校内の地下セン

ターコートには、子供たちが持参したり日本フィルが持ち込んだ楽器が多数。しかし、まずはみんなで輪になり、歌とダンスの時間からだ(これがマイケルさんのスタイル)。スペイン語で歌いながら踊り、まるでパーティのような雰囲気になると、次は「ドン・キホーテっていったい誰だろう、ど

ういうお話なんだろう」という簡単な紹介を。さらには作品の精神的な支柱である「騎士道」といったキーワードが提示され、いよいよ音楽……と思いきや、なんと次は「自分たちだけの騎士道」(こども憲法みたいなものだろうか)を作ってみようという時間に。

■子供たちのイマジネーションが音楽への理解につながる

子供たちは3つのグループに分かれ、それぞれが騎士団を名乗る。さらには団の規律を守るための誓約についてディスカッション。「なにごとにも勇気を」「笑顔で仲良く」「リーダーには敬語で話そう」といったルールが次々に発案され……あれ？これって音楽ワークショップですよ、マイケルさん。「音楽のストーリーを教えるだけでは退屈してしまうし、子供たちが自分は騎士だと信じながら、これは自分たちの物語と音楽だと思うことが大事なんです。そこにイマジネーションが生まれ、『鉄の鎧ってどのくらい重かったんだろう』なんていう疑問が浮かべば、リヒャルト・シュトラウスが仕掛けた音楽の捉え方も変わってくるはずですよ。」

各騎士団のルールが発表されたところで、騎士になりきった子供たちはいよいよ楽器を手に、音楽を作り上げていく。まず最初に日本フィルの楽員たちが「ドン・キホーテ」の主題(チェロ)や「サンチョ・パンサ」の主題(ヴァイオリン)を演奏。さらにはマイケルさんが「ドン・キホーテは旅をしながらいろいろなものに出会うんだ」、「風車」「羊の群れ」「空を飛ぶもの」を絵などで見せながら、音楽作りの素材を子供たちに与えていく。

3つのグループ…いや騎士団には日本フィルの楽員がアドヴァイザーとして加わり、子供たちから生まれるいろいろなアイデアを集約。約30分のディスカッションを経て、いよいよ完成した音楽を持ち寄っての発表会だ。子供たちは緊張しながら自分たちの演奏を行ったり、他の騎士団の演奏をまじまじと見つめたりしていた。



「騎士団」で団結し創作していく。

言わばそれらは「(リヒャルト・シュトラウスの)『ドン・キホーテ』による変奏曲集」であり、定期演奏会を楽しむためのスペシャル・チケットでもある。事実、参加した子供たちは9月の定期演奏会をサントリーホールで聴き、ドン・キホーテたちの行動や心情などについてさらに思いを巡らせたようだ。

さまざまな年齢層が参加した3回の『オケのテイキは、おもしろい』。今後も4回目、5回目…と続き、日本フィルの新しい名物シリーズとなることを期待したい。